

富山大学教育学部附属教育研究実践総合センター

Center News

Center for Educational Research and Practice,
School of Education, University of Toyama

第44号

(2024年3月15日発行)



心を一つに（内地留学生の研修風景：呉羽青少年自然の家にて）

センターニュース第44号 目次

02	巻頭言	学部長 徳橋 曜
03	挨拶	センター長 上山 輝
04	報告	客員教授 久保 雅則 客員教授 宝田 幸嗣
05	報告	附属学校園共同研究プロジェクト
06	学園通信	附属幼稚園／附属小学校／附属中学校／附属特別支援学校
08	活動報告	学習環境研究部門 教育臨床研究部門 教育工学研究部門 環境教育部門
10	報告	内地留学を経験して
11	報告	令和4度教大協北陸地区教育実践研究指導部門研究協議会 第101回国立大学教育実践研究関連センター協議会 第102回国立大学教育実践研究関連センター協議会 国立大学教育実践研究関連センター協議会Zoom情報交換会
12	業務報告	センター日誌 編集後記

「梓」を壊す・「梓」を守る

教育学部長 徳橋 曜

令和5年度も終わろうとしています。そこに「無事に」という一言を付せないのは、言うまでもなく、令和6年1月1日の能登半島地震が石川・富山両県に甚大な傷を与えたからです。震源に近い珠洲市や輪島市をはじめとする能登地方各地に加え、氷見市や高岡市でも小さくない被害がありました。こうした災害は子ども達の生活や学習環境にも大きな影響を与えます。珠洲市、輪島市、能登町は希望する中学生を白山市と金沢市に集団避難させ、その数は合計400人ほどになりました。被災地の復興もまだ見通せない状況で、教育という側面においても、安心して学べる環境の確保、被災した子どもの心のケア、地域の教育体制の再編など、課題は山積しています。金沢大学と富山大学も、こうした課題に「当事者」として向き合っていく必要があります。金沢大学では、学校教育学類を軸として、白山市と金沢市に集団避難した中学生達の休日の生活・学習をケアするために学生ボランティアを現地に派遣しました。共同教員養成課程として本学部もこれに協力する方向で検討したものの、諸事情から関与しないままになりましたが、「日常」が喪失したあるいは停止した状態の子ども達を支えるために何ができるのか、は今後の課題でしょう。既存の梓組みに囚われない対応や方法論も必要かもしれません。

一方、奈良教育大学附属小学校で一部、文部科学省の定める教育課程から逸脱した教育が行われていたという報道が、同じく1月にありました。奈良教育大学学長が謝罪し、文部科学省は全国の国立大学附属学校園に、同様のことがないかどうか確認するようにと通知してきました。報道などでは、学校教育法や学習指導要領に沿わない教育方法（「毛筆による書写」の不実施、教科としての道徳の授業不足、教科書の不使用）がいかに「不適切」だという論調が目立ちましたが、教員の側としては教育の工夫として独自のプリントを使う等、特に不適切との意識はなかったようです。学校側は背景として、「国立の附属学校として指導法や教材の開発を独自に行ってきたが、教員が独自の考えに基づいて実施するなど、学習指導要領などを省みることはなかった」ことを挙げています。国立大学の附属学校園が、地域の教育をリードするような独自の方法論を生み出していくことは重要です。しかし、「学習指導要領を省みることのない」ような独自性が、公教育なかんづく義務教育で許容されるものなのか、考えるべきでしょう。梓にはまった教育を漫然とすれば良いわけではありませんが、公教育には守るべき「梓」もあります。附属学校が地域の公立学校とは異なる特殊な教育を行う場と認識されるようなことは、是認されるべきではありません。

顧みて本学部と附属学校園は、教育委員会と公立学校との共通の土台に立って、人事交流を行ない、堀川小学校をはじめとした公立学校とも密につながっています。その中で、公立学校の教育をリードするような方法論を工夫するという課題を検討・追究していかなければなりません。教科や学校種といった梓組みにとらわれず、広い視野から教育方法を検討し、あるいは附属学校園の教員との共同研究を行いながら、学校教育法や教育指導要領の梓は守りつつ、富山県の教育現場の梓を壊せたらと思います。そのために教育研究実践総合センターの力に期待しています。来年度もよろしくお願ひします。

柔軟な授業形態への対応の重要性について

教育研究実践総合センター長 上山 輝

2023年から2024年にかけての年末年始、共同教員養成課程として私が初めて担当したいくつかの授業で、合計3回の授業形態の変更がありました。1回は予定されていたもので、残り2回は急遽実施されたものです。

一つ目の変更は、対面授業（金沢大学の教室との遠隔授業を含む）から、年末年始の大学の方針に従いオンデマンド形式（メディア授業）に変更したことでした。具体的には、3つの課題に関する実作業の動画を撮影し、同様の作業を学生たちが行なった上で考察したことについてレポートを記述するというものです。3つに分かれていることから、決められた締め切りまでであれば、別々に自由に課題に取り組むことができます。結果として、震災が起こった直後（1月5日）だったこともあり、締め切りを延長した結果、ほとんどの学生が無事に課題を完了できたのではないかと思います。

二つ目の変更は、一つ目と同じ授業でのものでしたが、昨年末に雪の影響で対面授業がオンライン（Zoom）授業に急遽変更されたことについてです。学部として300人対応のアカウントを契約していただいていたこともあり、コロナ禍で行われていたZoomでの授業を思い出しながら、なんとか実施できたとは思いますが、しかし、反省点もありました。代表的なものとしては、プログラミングについて全員が取り組む中で説明したのですが、学生ごとの環境を全て把握できなかったことにより、対面であれば近くの友人たちとの協働的な学びの中で実施できていたものについても、「～がうまく動きません」というチャットに教員が個別に対応する時間が多かったということが挙げられます。ある程度想定して資料等を作っていたわけですが、その予想を超えたことに対する対応、または代替策が十分に検討されていなかったのではと反省させられる結果になりました。

三つ目も地震の影響での変更でした。金沢大に赴いて担当する対面授業（デザイン）だったのですが、対面授業が中止になったことで、急遽制作物の作り方を動画で説明する必要が生じました。もちろん、他の授業と同じように作り方説明のための資料は用意していたのですが、それは対面を前提とした資料で、作り方のコツのようなものはその場で説明すべき内容だと考えていたのです。本来対面でないと授業が成立しないと想定された内容故に、金沢大に赴いて行う授業となっていたので、休講も頭によぎりました。しかしなんとかしてみようと、手元を撮影するためにカメラアングルを固定する方法の模索からはじまり、実際に自分でもあらためて制作し、その内容を撮影した映像について、数時間かかる作業の行程を、キャプションを入れながら10分以内に編集するという作業に急遽取り組みました。当日は、Zoomでの授業と併用してアップロードした動画を確認しながら取り組んでもらい、次の週に金沢大を訪問した際には、指示したところまで各自が作業を進めていることが確認でき、ホッとすることを思い出します。

富山市内の小中学校では、この冬、インフルエンザ、ノロウィルス、コロナなど様々な状況が重なり学級閉鎖や学年閉鎖になったところも多かったように聞いています。そのほか、震災の影響も含め様々な事態に直面したことでしょう。このような時にこれまでのコロナ禍で培われたノウハウが生かされていれば良いだろうなどは思いますが、自分自身に起こった状況を思うと、かなり大変だったのではないかと推察します。自然災害や病気等の蔓延に対し、学校現場がどのように柔軟に対応できるのかについてあらためて考えさせられました。今後も、AI等による急激な状況の変化なども視野に入れながら、常に柔軟に対応するための不断の努力を怠ることなく研究教育を進めていきたいと考えています。

学校と大学をつなぐ「教育フォーラム2023」

「これからの学校教育における学びについて考える」

センター客員教授 久保 雅則

11月18日に、8回目を迎える「教育フォーラム2023」を開催しました。これは、学校と大学が連携して、教育実践と教育研究の融合を図るとともに、教師と研究者による協同の学びを推進する目的で、年に一回開催しています。

今年は、子供や国民の幸福度が高く、ウェルビーイングな社会を目指し、世界に先駆けてアクティブ・ラーニングを取り入れたオランダの学校教育について学びながら「学び」について理解を深めるとともに、単元内自由進度学習や地域に根ざした教育活動の実践などから、これからの授業の在り方についてグループ協議を中心に考えを深めていきました。

オンライン参加も含めて、50名の先生方、学生、教職大学院生、大学教員、教育機関等の方々の参加で、様々な立場から「これからの学校教育における学び」について話し合い考える機会となりました。



〈主な内容〉

1 講演等

「オランダの教師と子供の主体的で能動的な学びを促す組織改革」(録画)

富山大学教職大学院 澤 聡美 先生

「3つの国のそれぞれの教育」～日本、ブータン、オランダを比較して～

元島根県立隠岐島前高校ハウスマスター 松田加奈子 先生

2 実践発表

①「個別最適な学びと共同的な学びを実現するための授業改善」

～一人一台端末を活用した算数科単元内自由進度学習の実践を通して～

入善町立黒東小学校 古田 香織 先生

②「地域に根ざした学校づくり」～コミュニティ・スクールの運営と教育活動～

富山市立八尾中学校 橋本 明博 先生

〈参加者の感想の一部〉

- この教育フォーラムは、教育の根本について、グループ協議で対話的に学ぶことができ、とても刺激をいただけ。学校でもこのような本質的な話し合いがあるとよいと思う。
- オランダの教育を見習うにしても、教師一人の力ではどうすることもできないこともあるが、試行錯誤して子供のために考え、実践に必要な工夫を考えることができた。
- 個別最適な学びに関する議論や情報が豊富で、より効果的な学習環境を提供する重要な点を知ることができた。
- イェナプランの実践や自由進度学習、探究的な学習などととても勉強になった。これらの活動は、教師が子供を信頼することが大切で、教師の主体的に挑戦する姿が子供の主体性につながると思った。

「主体的・対話的で深い学び」や「個別最適な学び」と「協働的な学び」などの言葉だけに踊らされず、教える授業から学ぶ授業への転換を図りながら、これからの時代、子供たちにどんな力が必要なのか、その子供たちの姿を共有しながら、幼児教育から大学教育までの「育てる」ことのつながりを大切にした全体像のある教育行政や、校種を超えて「育ち」をつなげることの必要性を改めて感じました。

学びを実践につなぐ

センター客員教授 宝田 幸嗣

内地留学は、教育臨床に関わる理論や手法を学び教員としてステップアップできるだけでなく、リフレッシュして、気持ちも新たに児童生徒と向き合うきっかけにもなります。担当する授業（水曜日の午後、前期・後期各18回）では、仲間との交流を通して心理解放を促進するとともに、学んだことが日々の実践につながるよう、体験を通じた学び合いや振り返りを大切に、有用性を実感できるように配慮しています。授業は、次のような内容で構成しています。

1 ウォーミングアップ

授業の冒頭部分は、卓球やゲーム等を仲間と楽しめます。楽しい時間を共有する中で、関係性の深まりを実感し、心を開いて活動に取り組めるようになることをねらいとしています。

2 学外研修

呉羽青少年自然の家でグランドゴルフ等に興じたり、匠の里において陶芸に没頭したりする機会を持ちます。教員としての役割を外し、普段とは違う環境で仲間と交流したり、自分自身と向き合ったりすることを通して、他者理解と自己理解を深めます。

3 人間関係づくりの手法

構成的グループ・エンカウンターやグループワーク・トレーニング、ソーシャルスキル・トレーニング等、児童生徒の人間関係づくりの手法を仲間との演習を通して体験的に学びます。学校で活用することを想定して、効果的な実施時期や場面、求められる工夫や配慮等について話し合います。

4 学校における教育相談の進め方

面接・面談の進め方やカウンセリングの技法等について学んだ後、研修生が過去に経験したケースのロールプレイを通して、児童生徒や保護者との面接のポイントを話し合います。また、同僚へのコンサルテーションの在り方についてもロールプレイを通して体験的に学びます。

5 気になる児童生徒への対応

不登校やいじめ等の現状を踏まえ、求められる指導・支援の在り方について意見交換します。また、発達障害等の気になる児童生徒について、研修生が過去に関わったケースを基に理解を深め、効果的な支援の在り方を話し合います。



ナイスショット！（呉羽青少年自然の家）



全集中（匠の里）

附属幼稚園から

附属幼稚園 陽 弥生

本園では、令和4年度より「豊かな感性と表現する力を育む—もの、人、こととの関わりの中で—」という研究主題で研究を進めてきました。二年次である今年度は、「教師の援助を探る」と副題を新たに設け、子供たちの豊かな感性と表現する姿を支える教師の援助に焦点を当てて、研究しました。

援助の在り方を探るために、保育の中で捉えた子供の姿と教師の援助を記録しました。また、それらを基に援助をカテゴリ分けし、「援助の事例表」を作成しました。その過程で、互いの記録を見たり、援助の意図を聞いたりし、意見交換を重ねる中で、子供の姿をあらゆる視点から捉え直したり、その援助が子供たちにどのように働いていたのかを振り返ったりすることができました。

公開園内研修会では、互いの保育を実際に見合い、そこで見られた子供の姿、その姿に対する教師の援助、援助後の子供の姿を感性と表現の視点から捉えました。また、子供の姿と教師の援助について協議する中で、その日の子供たちの豊かな感性と表現する姿を支えていた教師の援助についてや、協議で明らかになった、さらによりよい援助についても考えることができました。

今年度の研究の成果は、令和6年度6月に開催する保育フォーラムにおいて報告いたします。

令和5年度は、6月15日（木）に、保育フォーラムを開催しました。愛知教育大学教育科学系 幼児教育講座 学系長・教授 鈴木裕子先生にご講演をいただきました。県内外から多くの方に参加していただき、共に学ぶ機会をもつことができました。また、10～12月に行った園内研修会は、一般公開を再開しました。大学の先生方には、保育を実際に見ていただき、年間を通して専門的な立場でご意見やご助言をいただきました。今後も附属幼稚園の研究にご指導とご協力をお願いいたします。

附属小学校から

富山大学教育学部附属小学校 研究部長 神田 靖大

本校では、令和2年度より「学び続ける子供が育つ授業の創造—対話に着目して—」を研究主題に掲げ、4年計画で研究を進めてきました。この間、子供が学び続けていくためには、やはり対話が必要であり、その対話は、教科らしい内容や方法があるとともに、その子らしい見方・考え方があふれるものでなくてはならないことが分かりました。そこで、研究最終年度の今年度は、「各教科における学び続ける子供の対話の在り方を明らかにする」を副題に、研究を重ねてきました。その結果、本校が求めている対話を生み出すには、以下のような条件があることが明らかになりました。

一つ目は、子供が対話へと向かう状況を整えることです。そのために、子供の学ぶ目的や願いの共有、課題解決に必要な知識や技能の習得、学習課題の焦点化が重要であることが分かりました。

二つ目は、各教科の見方・考え方が働く授業を構想することです。さらに、その子らしさを発揮することができるよう、物事を捉える視点や、思考を深めていく方法や考えを明確に位置付けて授業を展開することが重要であると分かりました。

三つ目は、相手意識です。相手とは、協力しながら学習を練り上げていく仲間はもちろんのこと、学習対象として取り上げる人物、学習の成果を伝える相手等も含まれます。こうした相手の「思い」を理解したり考えたりするとき、対話の内容は焦点化され、子供自ら単元の本質に迫っていくことが分かりました。

これまで6月に行ってきた研究発表会を、来年度より11月に行います。（11月22日予定）そこでは、4年間の研究の成果と、次期研究の方向性について、お示ししたいと考えております。今後とも、附属小学校の研究にご指導ご協力をよろしくお願いいたします。

附属中学校から

附属中学校 本江信一郎

本校では研究主題「主体性の高まりをめざす課題学習」のもと、令和2年度から「『見方・考え方』を働かせ、『深い学び』を実現する授業づくり」を副題に掲げ、以下の2点に視点を置き、研究を進めています。

- ①「深い学び」を実現する単元構成
- ②「見方・考え方」を働かせる問い

今年度は、生徒がどの程度「深い学び」を実現しているのかという「深い学び」の見取りに注視し、研究を進めました。「深い学び」を見取るためのルーブリックを作成し、その評価における規準や基準が妥当なものかどうかを検討したり、振り返りの際における問いはどのようなものが適切なのかを検討したりするなどしてきました。そして、教科内での検討や、校内研修における他教科との意見交換を経て、新たな方法で学習状況を見取ったり、より適切な問いかけで振り返らせたりするなど、実践的に取り組みました。その中で、クロームブックを利用して動画や写真等を活用することが有効な教科もあれば、単元の導入や終末でレポートを書かせることが有効な教科もあることが見えてきました。

来年度の教育研究協議会（6月7日）では、上記内容を踏まえた4年次の研究成果を報告します。また、講師に早稲田大学教職大学院 教授 田中博之先生をお招きして講演を予定しております。多くの先生方にご参会いただき、ご意見やご助言をいただきたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

附属特別支援学校から

附属特別支援学校 北村 満

本校では、研究テーマを「知的障害のある児童生徒の予測困難な未来社会を拓く情報活用能力の育成」と設定し、新たな形で研究をスタートしました。これからの時代は、すべての学習の基盤となる資質・能力として情報活用能力の育成が求められています。そこで、本校では、文部科学省で示された「情報活用能力育成のための想定される学習内容」を基に、研究内容をICT活用、プログラミング教育、デジタル・シティズンシップ教育の三つの視点で設定し、それぞれの部会を立ち上げ研究を進めてきました。

プログラミング教育については、令和元年からの取組の実績を踏まえ、今年度は新たなプログラミングツール「embot」を小学部から高等部までの全学部で用いることで、発達段階に応じた学習内容の設定の在り方を探る授業研究を行いました。

デジタル・シティズンシップ教育には令和4年度から取り組んできており、コンピュータ等の情報手段を用いた学習活動を進める上で特に必要性が高いと考えられる個人情報、著作権、ファクトチェックを内容に取り入れた授業研究を行いました。

ICT活用については、様々なICT機器を活用して学習内容の理解を深める授業や、情報手段として生成AI（BingAI）を活用し、問題解決につなげる授業について研究しました。

今年度の研究成果については、12月に公開教育研究会を人数を限定し参集で行い発表しました。1月～2月にかけてはオンデマンド配信も行いました。県内外から約160名の参加がありました。

来年度も更なる研究実践を進め、公開教育研究会で発表させていただきます。今後とも、附属特別支援学校の研究にご指導とご協力をお願いいたします。

活動報告

学習環境研究部門

センター教授 長谷川春生

学習環境研究部門では、本年度も、富山大学ICT・DS教育支援事業の一つであるオンラインセミナーの運営を行いました。第1回目は、6月28日（水）16:00～16:45に、富山大学大学院教職実践開発研究科准教授の増田美奈氏より、「これからの学校教育における学びについて考えるーオランダ公立小学校の実践を事例にー」というテーマで講演をしていただきました。第2回目は、11月1日（水）16:00～16:45に、富山大学教育学部准教授の宮城信氏より、「生成AIを活用した授業の実践と課題」というテーマで講演をしていただきました。どちらも45分という短い時間に分かりやすく内容をまとめてお話をしていただき、小中高等学校・特別支援学校の勤務時間内に校内研修等として位置づけることも可能なかたちで実施することができました。また、参加申込みをしてくださった方には、YouTube限定公開も行い、後日、多くの方から視聴していただくこともできました。なお、現在、その活用法が大きなテーマとなっている生成AIについては、本年度内にもう一度オンラインセミナーを実施する予定です。

学習環境研究部門の長谷川研究室では、10月から12月の3カ月、入善町立入善小学校の太田浩二先生、上市町立白萩西部小学校の藤堂知佳先生が、内地留学生として研修をされました。お二人には学習環境研究部門の研究協力員としても様々な研究や取組をしていただきました。特に、立山町立釜ヶ淵小学校で11月24日（金）に開催された、松嶋建設と富山大学との連携によるドローンプログラミング体験会では、その準備や運営を中心となって進めていただきました。また、研究の成果は、3月3日（日）開催の北陸3県教育工学研究大会（石川大会）において、太田先生は「ICT活用に関する校内研修の実践と評価」、藤堂先生は「読みに困難をもつ児童に対する効果的なICTの活用」というテーマで発表をされました。

教育臨床研究部門

センター教授 石津憲一郎

センター講師 近藤 龍彰

教育臨床部門では、現在2名体制で部門運営を行っています。今年度も例年通り、富山県教育委員会との共同事業、各県内の教育センターから派遣される内地留学の先生の受け入れを行いました。R5年度は前期・後期合わせて11名の先生方が研修を行いました。研修のテーマとしては「不登校の未然防止に向けた想起的発見における教師の支援」や「いじめ問題における加害児童への指導・支援の在り方」などがありましたが、いずれもこれまでの教育経験を振り返るとともに、現場に活用できる知見や視点を修得していったものと思われれます。本事業の一部は教員カウンセラー（富山県カウンセリング指導員）育成事業の一環として行われており、現場への臨床心理的知識の普及に貢献しています。

今年度はまた、新型コロナウイルスの感染拡大の懸念のため中断していた教育臨床部門研修会をオンラインではありますが開催することができました。2023年12月1日（金）に、お茶の水女子大学の砂川芽吹先生に、「自閉症スペクトラム症のある女の子・女性の社会適応 - カモフラージュという視点からの理解と支援 -」をテーマに、ご講演いただきました。当日は現職の先生を含め48名の参加者がありました。見過ごされがちな女性のASDの困難について、理論的にも実践的にも深く学ぶ機会となりました。

小規模なものとしては、「教育臨床研究会」および「教育心理学勉強会」を開催しました。年4回の「教育臨床研究会」では、過去の内地留学生と教職大学院の「学びの継続の一環」をテーマに、約25名程度の参加者の中で理論と実践の往還を続けています（今年度はすべてハイブリッド開催として行いました）。「教育心理学勉強会」では、現職の先生方と学生が10名程度集まり（Zoom等を活用）、教育心理学関連の知見について学び合いました。今年度は、鈴木宏昭（著）『私たちはどう学んでいるのか 創発から見る認知の変化』（2023年6月24日）、スタニスラス・ドゥアンヌ（著）『脳はこうして学ぶ 学習の神経科学と教育の未来』（2023年9月30日）、成田奈緒子（著）『「発達障害」と間違われる子どもたち』（2023年12月9日）、今井むつみ他（著）『算数文章題が解けない子どもたち - ことば・思考の力と学力不振』（2024年2月17日）、といった書籍を取り上げて、参加者で議論しました。

今後も地域の教育現場に対して有益な情報発信を続けていきたいと思っております。

教育工学研究部門

センター講師 小澤 郁美

教育工学部門では、「主体的・対話的で深い学び」や「個別最適化学習」の実現に向けた活動を実施しています。2023年度は、①研究会の実施、②研究会の公開講座、③学習支援事業、④児童生徒の学習改善を目指した講演を実施いたしました。

まず、研究会については、現在の教育における諸問題の解決に向け、学校と大学との連携による教育実践と教育研究の融合を図った研究会（明日の学校を創る研究会）を定期的に行っています。本年度は、「オランダの教育」「振り返りの効果的な実施とその効果」「地域連携」など様々なテーマのもと、参加者で討議を行いました。また、研究会の公開講座として「教育フォーラム2023」を11月18日（土）に実施いたしました。

また、本年度から学習支援事業がスタートし、認知心理学や教育心理学の知見を活かした個別学習支援を実施しています。本年度は、地域の小学生数名を対象に、国語や算数の学習改善を目指した個別学習支援を行いました。支援では、認知心理学の知見を活かし、自立した学習者の育成を目指す認知カウンセリングや、個人の認知特性に応じた支援を実施しています。さらに、児童生徒の学習改善を目指した講演活動として、県立高校にて「教育心理学の知見を活かした効果的な勉強方法」をテーマに講演を行いました。効果的な勉強方法を実際に体験してもらいながら解説し、参加者からは「勉強のやり方が分かった」「これから意識してやってみたい」といった声をいただきました。

今後もこれらの活動を継続し、地域の教育改善の一助となるよう努めてまいります。

環境教育部門

センター教授 高橋 満彦

研究協力員 増山 照夫

令和5年度は、栽培活動等の活動拠点を西田地方から寺町の自然観察実習センターに移して、2年目となり、なんとか落ち着きをえて、活動を終えることができた。これも学部の御理解もあって、大型物置、カーポートの設置など、設備改善は行えた結果と言える。しかし、実習等の授業も行われるプレハブ管理棟は、老朽化が進んでいるにもかかわらず、改築の予算はつかず、1月の地震で傷みも出たため、外周フェンスと共に、今年度修繕予定である。管理のための人的資源も、最低限の予算での外部委託であり、ボランティアの御奉仕にも頼っている。

このような状況下でも、農場実習（「栽培技術実習」）は、5名ほどの学生を迎えてにぎやかに実施された。圃場での各種野菜類の栽培のほか、富山市山田地区の防獣柵管理のお手伝いなど、農事教育と野生動物教育の接点も追求している。栽培技術実習は、人間発達科学部の人気科目であるが、教育学部への移行に伴う学年進行で、履修者は減少に向かっている。一方で、次年度からは、教育学部の生活科の実習が入るので、今年度中に準備を始めている。

また、研究活動は、昨年度から科研費基盤研究B（「鳥獣保護管理の現代的課題に適応し

た人と場の制度再構築：全国の猟師達と考える処方箋」代表者高橋満彦）の継続と共に、今年度から、音楽の増田建太講師の協力を得て、開進堂楽器との共同研究「子供を対象にした創造的な音楽実践の検討」を実施している。今年度教育学部唯一の共同研究であり、研究面からも学部に貢献出来てうれしく思っている。

いずれにしても、本部門の活動は、予算と資源の必要となるものであるもので、引き続きご支援をお願いする所存である。

内地留学を振り返って

南砺市立南砺つばき学舎 神谷 晃正

学校現場で日々の業務をこなす中、自分の教師としての立ち振る舞いを「本当にこれでいいのだろうか」と悩み続けていました。そんな中、内地留学の話をいただき、半年学校を離れることになりました。大学の講義や演習の中で、これまで感覚でしてきた「相手を知ろうとすること」を様々な面で理解することができました。また、ゼミの活動を通して改めて「人と関わる重要性」を感じました。これまでの自分を振り返ると一人で抱えて視野が狭くなっていたように思えます。内地留学の先生方の考え方や生き方を聞くことで、自分自身のこれからの在り方を改めて考えることができました。内地留学では、多くの出会いと学びがありました。これは、ここでしか感じることでできない素晴らしいものだと思います。そう感じることができるのは石津先生、寺西先生、宝田先生をはじめ現職の内地留学生、研究室の学生がいたからだと思います。また、内地留学生を受け入れる環境が安心できる居心地のよい場所だったからだと感じます。この学びを現場に戻ったときに還元できるようにするとともに、子供一人一人に寄り添い、学校が内地留学の場所のように居心地のよい場所になるように努力していきたいと思います。

高岡市立芳野中学校 高田 駿

内地留学では普段の学校現場では得られない学習や経験をさせていただきました。現場では毎日授業や学級の中で生徒と向き合い、取り組んできましたが、日々の業務に忙殺され、自分の取り組みや生徒との関わり方について振り返る機会がなかなかありませんでした。内地留学では、これまでの教員生活を客観的に見つめ直し、自分の取り組みは知識や理論が伴わない経験論に頼ったもので、子どもたちの目線に立っていないことに気付くことができました。大学での講義やゼミでは、子どもの発達や特性に関する理論について、これまで出会った生徒の姿を振り返りながら、実感を伴った学びをすることができました。また、講義だけでなく、同じ内留生の先生方との意見交換を通して、自分の教育観がより良い方向に変化していくことを実感しています。今は内地留学でさらに知識を得たいという思いとともに、いち早く現場に戻り、学んだことを実践し、内地留学で得たものを生徒や他の先生方に還元していきたいと思っています。そして、石津先生に教えていただいた「相手のメガネをかけさせてもらう」という言葉を心に留めて、相手に寄り添うことができる教員であり続けたいと思います。

新川みどり野高等学校 岩井中 栄太郎

これまでは、本校の不登校や離職、進学後の中退、特別な支援を要する生徒への対応と卒業後などに対して、思いつきや経験論で対応したため、問題が悪化することもありました。大学の講義や演習では、基本的な知識からより実践的な理論まで学ぶことができ、毎日が「面白いなあ～。へえ～、これこういう考えのもとに行動していたのか。このことを学校現場のどの場面で生かしていこうか。早く実践してみたい」など脳内のワクワクが止まらない期間となりました。この研修で一番大切なことを学びました。それは「和(居場所)」です。校種は違えども同じ思いをもった内地留学生の5名の先生方と一緒に学んだり、校外へ体験活動や施設見学等に行ったり、時にはご飯を食べに行ったりと、初任者研修の「大変だけど、この仕事、楽しくて面白いよね」と言っていた頃を思い出しました。また、石津ゼミ内の話しやすい環境づくりや大学生、大学院生、小中学校の先生方など幅広い層の方との交流を通じて広がった見識や「和(居場所)」の大切さ、課題を論理的かつ経験論・俯瞰的に捉え実践することなど、学校現場や生徒一人一人に還元できるようにしていきたいと思っています。



報告

第103回国立大学実践研究関連センター協議会報告

近藤 龍彰

令和5年9月15日（金）にZoomでセンター協議会が開催された。残念ながら富山大学からは参加することはできなかったが、定期的な参加を継続していきたい。

第104回国立大学実践研究関連センター協議会報告

石津 憲一郎

令和6年2月16日（金）にZoomにて協議会が開催された。富山大学からは上山センター長と石津が参加した。まず協議会からの退会についての報告がなされた。また今年度の活動がすべて終了したわけではないが、2023年度の会計報告がなされ、続いて2024年度の予算案が承認された。その後各大学より活動内容について報告がなされた。富山大学からは各部門における活動や附属学校園との共同教育・研究プロジェクト、県との連携事業における内地留学生の派遣等についての活動について報告した。その他僻地教育に力を入れる大学や教師を目指す学生をセンターとしてどのように支えるかに力点を置く大学等様々な活動があることが共有された。

業務報告

センター日誌 令和5年度の実践総合センターの主な行事

令和5年（2023）

- 6月29日 第1回センター運営委員会議・第1回センター紀要編集委員会
9月4日 第2回センター紀要編集委員会
9月15日 第103回国立大学教育実践研究関連センター協議会（Zoom）
11月1日 第3回センター紀要編集委員会
11月18日 教育フォーラム2023 これからの学校教育における学びについて考えよう
～オランダの教育から、学びについて考え これからの授業に活かす～
12月1日 教育臨床研究部門研修会 教育臨床講演会 自閉症スペクトラム症のある女の子・女性の
社会適応 - カモフラージュという視点からの理解と支援 -

令和6年（2024）

- 2月16日 第104回国立大学教育実践関連センター協議会（Zoom）

編 集 後 記

今年度も、多くの方々のご協力により、センターニュースの44号をお届けできることとなりました。長く続いた新型コロナウイルスの感染拡大も収束ムードとなり、センターの活動も徐々に充実したものにへと展開しつつあります。とはいえ、教育現場を取り巻く環境はいまだ厳しさを増しており、現場へのサポートが質・量ともにより一層求められてきております。実践センターとして何ができるのか、しっかりと検討し、取り組んでいきたいと思っております。

印 刷 令和6年3月11日
発 行 令和6年3月15日
編集発行 富山大学教育学部附属教育実践総合センター
代表者 上山 輝
〒930-8555 富山市五福3190 ☎076-445-6380